

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月25日現在

機関番号：40104

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730465

研究課題名（和文） 精神障害者の福祉的就労における主体性獲得過程に関する研究

研究課題名（英文） A study of the process of acquiring independence in Welfare-based employment for People with mental disorder

研究代表者

阿部 好恵（ABE YOSHIE）

帯広大谷短期大学・社会福祉科・講師

研究者番号：90406009

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神障害者が福祉的就労において主体性を獲得した過程とその要因を仮説的に明確化することを目的とした。就労支援サービスを利用する精神障害者10名を対象にインタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した。その結果、外的要因として援助者からの【「頼られ」体験】とこれが契機となり、働く上で基盤となる【「等身大の自分」の確立】の2つが必要不可欠であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the process by which people with mental disorder acquired independence in welfare-based employment, and its factor. Ten people with mental disorder using the employment support service were interviewed. Their response were then analyzed via Modified Grounded Theory Approach. Based on the result, it was concluded that the information gathered from the staff, and the personal understanding of the patients with mental disorder as basis in working are both indispensable.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：精神障害者、福祉的就労、主体性、M-GTA

1. 研究開始当初の背景

2005（平成17）年の障害者自立支援法等成立以降、障害者が利用する施設・サービス体系が抜本的に再編され、その中でも就労支援の強化は著しい。

阿部（2008）において、わが国の精神保健福祉領域の先駆的な地域生活支援活動を行っている法人Xの利用者10名の調査データを基に、精神障害者が精神科病院を退院し、

地域生活の中で再獲得した日常生活の構成要素について検討を行った。研究結果の一つとして、就労は当事者の自尊感情の回復に繋がるということが明確化された。また調査対象者の状況や調査データから、主体性を持って働いている当事者は比較的長期に亘り安定した就労の様子が見られ、この経験が自尊感情にも影響していることが示唆された。以前に比べ、障害者の「働く」ことが重視される実情

から、福祉的就労に焦点を当てて継続した検討の必要性を認識した。

2. 研究の目的

本研究では精神障害者が福祉的就労において主体性を獲得した過程とその要因を仮説的に明確化することを目的とする。なお、本研究における主体性とは「障害を理解し、自分の意思を持ち、等身大の姿で行動（就労）する態度」とした。

3. 研究の方法

(1) M-GTAの採用理由

本研究では、質的研究法におけるインタビュー調査を採用し、M-GTAを用いて分析を行った。第一に調査対象者となる精神障害者は福祉的就労というヒューマンサービス領域において就労支援のサービスを利用していること、第二に福祉的就労における当事者同士や職員等との相互作用に関係すること、第三に精神障害者が主体性を獲得する過程とその要因を仮説的に明らかにするため M-GTAを採用した。

(2) 調査対象者の概要

調査対象者は、就労支援サービスを利用する精神障害者で、第一に一施設・事業所で5年以上就労の経験がある、もしくは、複数の施設・事業所で5年以上就労の経験があること、第二に調査時の体調が安定していること、第三に調査依頼を承諾すること、以上の条件を満たす者とした。最終的な調査対象者は統合失調症もしくは重度のうつ病がある、30～50代の男性7名、女性3名の計10名であった。なお、調査の依頼先は、面識ある事業所職員から助言を受けて選定した。

(3) 調査データの収集

調査データの収集の期間は2010年9月～2012年5月で、データ収集の方法はいずれも調査対象者との個別面接による。面接方法はインタビューガイドを用いた半構造化インタビューとした。面接場所は、いずれも調査対象者が働く施設・事業所の一室等を借りて実施し、調査記録は承諾を得た後 ICレコーダーに録音し、メモをとった。面接時間は合計785分（13時間5分）、1人につき65分～93分で、平均78分であった。逐語記録は合計A4版144枚であった。

データ収集では、調査者と調査対象者との相互作用によって収集されるデータに影響を与えないよう、調査概要の説明、対象者がリラックスできる場所を面接場所とし、緊張感を最小限に抑える等疲れや負担感を軽減した上で調査を行った。このため、施設・事業所に事前に訪問し、ミーティング等への参加、面接開始前に現在の作業内容等について自由に語る時間を確保し「波長合わせ」を行う等インタビュー内容の「厚み」を確保する

よう努めた。

なお、インタビューガイドは以下の5点とした。①現在の就労支援サービスを利用するきっかけは何か②働くことを通して得られたこと、自分自身に起こった変化（働く前と今の違い）や辛かったことはあるか③障害を持ちながら働くことの意味をどのように掴んだか。さらに、自分なりの働き方のコツや職場内の環境（仲間、職員等）等の影響について④「働きたい」という気持ちの背景、人生の中で「働くこと」の意味について⑤現在の就労の中で重要視すること・価値があることは何か。また、将来の就労に関する希望について。

(4) 倫理的配慮

調査対象者に対して①データに関して、この研究の目的以外には使用されず、秘密は守られること②論文での記載方法は、個人が特定されないようにすること③研究及び調査に対する疑問・要望を研究者に対して行うことができるということ④調査を否定する権利および調査途中での中断または中止する権利を有していること、等の事項について口頭並びに書面にて説明し、同意書によって了解を得た。

(5) データの分析手順

分析については、最初に分析テーマに照らし合わせ、データの中で最も多様性のある調査対象者の逐語記録を選定し、データの大きなまとまりごとに解釈及び定義を確定した。その際、分析ワークシートを作成、活用した。次に、データの多様性が認められる順に分析、概念を生成し、概念間の関係性、類似性や対極性の観点からも分析を進め、グラウンデッド・セオリーを生成した。

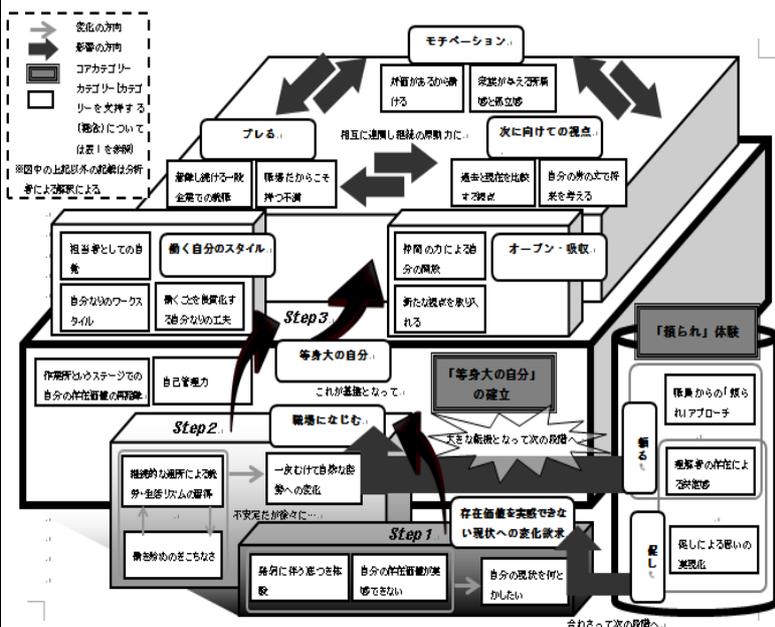


図1 精神障害者の福祉的就労における主体性獲得過程の全体構造図

(6) 信憑性の確保

研究結果の質を確保するため、調査・研究の進行、分析作業については調査者である筆者に加え、M-GTA を用いた研究を行った経験がある第三者をスーパーバイザー、分析協力者として、助言を受けて行った。

また、当初は調査を法人 X に依頼し、調査を実施する予定であったが、研究計画に対する同意が得られず計画を修正した。このため、法人 X と同様に先駆的な活動を行っている北海道にある法人 Y を通じて関連する施設・事業所の紹介を受け調査を実施した。また、逐語記録を読み返し、データの内容に地域特性等の偏りが無いよう 3 地区（道央・道東・道北）の施設・事業所にて調査を実施しデータならびにグラウンデッド・セオリーの信憑性を確保した。

4. 研究成果

(1) 結果

本研究の結果図は図 1 の通りである。最終的に採用したコアカテゴリーは 2、カテゴリーは 22、概念は 55 であった（表 1）。なお、コアカテゴリーは【 】, カテゴリーは《 》、概念は 〈 〉 で示した。

(2) 考察

① ストーリーライン

精神障害者の福祉的就労における主体性獲得の過程は、作業所等の就労支援を利用する以前に《発病に伴う底つき体験》や職を転々とする等を繰り返し《自分の存在価値が実感できない》状況の下、現状への変化の欲求が出現する。《自分の現状を何とかしたい》気持ちと次の段階へ進む要因として医師や医療 SWr 等の理解者からの了解を得て作業所利用を開始し《促しによる思いの実現化》がなされる。

《働き始めのぎこちなさ》が見られ、環境になじめず不安定な時期を経て、《継続的な通所による就労・生活リズムの習得》ができ、《一皮むけて自然な姿勢への変化》として自分の立場性の理解や素直さ、《理解者の存在による安定感》等が現れる。この頃合いの《職員からの「頼られ」アプローチ》が次の段階へ進む要因となる。この【「頼られ」体験】が大きな転機となり、自分の存在が必要とされている実感を得、《作業所というステージでの自分の存在価値の再認識》につながり、精神疾患や障害に対処できる《自己管理能力》をつけ基盤としての【「等身大の自分」の確立】がなされる。

これを基に「働く態度」として《自分なりのワークスタイル》や《担当者としての自覚》によって責任感や判断力を身につけ、《働くことを良質化する自分なりの工夫》によって持久力やスキルの向上を行っている。また、同じ障害を持ち体験が共有できる《仲間の力

表 1 カテゴリー構成

カテゴリー1《発病に伴う底つき体験》	
定義: 精神疾患の症状とそれに伴う孤独感や精神的苦痛等を体験する	
概念 1 (症状と孤独の辛い底つき体験)	概念 2 (精神科の患者になる抵抗感)
カテゴリー2《自分の存在価値が実感できない》	
定義: 自分で選択した職場が合わず職を転々とする等、疾病があり、何事もうまくいかず、自分の存在価値が実感できない	
概念 3 (選んだ仕事が続かない失敗体験)	概念 4 (自分の存在価値が薄れていく体験)
カテゴリー3《自分の現状を何とかしたい》	
定義: 発病し入院や通院中心の生活等自分自身の現状の変転を切望する	
概念 5 (発病に係る耐えきれない現実)	概念 6 (この現状を何とかしたい)
カテゴリー4《促しによる思いの実現化》	
定義: 医師や医療 SWr 等の作業所利用等の促しによって現状に変化の兆しが見え、作業所利用が実現する	
概念 7 (促しによって現状の壁に穴をあけて光が見える)	概念 8 (とにかく作業所に行ってみる)
カテゴリー5《働き始めのぎこちなさ》	
定義: 作業所利用の初期の段階は新しい環境になじんでおらず高い疲労感がある	
概念 9 (作業所への試験利用における心身の不安定さ)	概念 10 (自分のことでいっぱい他者に心を閉じている)
概念 11 (疲れてくたくた)	
カテゴリー6《継続的な通所による就労・生活リズムの体得》	
定義: 作業所利用が長期間継続できることにより就労・生活リズムの感覚を体得する	
概念 12 (継続的な通所で生活リズムを体得する)	概念 13 (作業所の慣習を体得する)
概念 14 (「しばらく休む」の判断でリズムを整える)	
カテゴリー7《一皮むけて自然な姿勢への変化》	
定義: 職員や自分の立場、他者との距離感を理解し、物事へのこだわりが減り、素直で柔軟な姿勢へ変化する	
概念 15 (職員対利用者としての立場のわきまえ)	概念 16 (否定的で頑固から素直で自然な姿勢への変化)
カテゴリー8《理解者の存在による安定感》	
定義: 精神疾患や障害を含め自分を理解し、信頼できる存在がいることによって得られる安定感	
概念 17 (信頼できる専門職の存在)	概念 18 (職員がいる安定感)
カテゴリー9《職員からの「頼られ」アプローチ》	
定義: 職員からの個別化された援助とともに就労に関する依頼や「頼られ」等の働きかけを体験する	
概念 19 (職員から「頼られ」る体験)	概念 20 (職員からの自分用の援助)
カテゴリー10《作業所というステージでの自分の存在価値の再認識》	
定義: 「頼られ」て嬉しいという素直な感情や作業所で必要とされる、成功体験等を通して新たな視点から自分の存在価値を再認識する	
概念 21 (「頼られる」ことへの素直な嬉しさ)	概念 22 (作業所で「必要とされる自分」の認識)
概念 23 (職員からの依頼や提案への試みと成功体験)	概念 24 (病気を持った自分を受け入れる)
カテゴリー11《自己管理能力》	
定義: 自分の体調を的確に把握し、対処方法や管理する力を身につける	
概念 25 (体調管理能力の体得)	概念 26 (体調の安定から得る回復実感)
カテゴリー12《自分なりのワークスタイル》	
定義: 作業所で無理せず継続して働くことができる自分なりのワークスタイルを身につける	
概念 27 (意識的に力まない働き方)	概念 28 (作業所で体得した自分なりの働くペース)
概念 29 (作業所は自分にちょうどいい場所)	
カテゴリー13《担当者としての自覚》	
定義: 作業所における役割の遂行により担当者としての自覚を持つようになる	
概念 30 (担当者としての責任感)	概念 31 (職場内の仲間への気配り)
概念 32 (自分の判断が成果につながる手ごたえ)	

カテゴリ14《働くことを良質化する自分なりの工夫》	
定義:働くことの質を豊かにさせるスペースのような自分なりの方法や工夫がある	
概念 33(適度な無理は自分のプラスなる)	概念 34(自分なりの方法で疲れを味わう)
概念 35(自分なりの作業到達点から得る満足感)	概念 36(回復に必要な職場以外の人のつながり)
カテゴリ15《仲間の力による自分の開放》	
定義:当事者同士の仲間(ピア)の力によって障害を隠さず、ありのままの自分でいられるようになる	
概念 37(仲間の喜びを共有する)	概念 38(仲間との関わりによる自分の開放)
概念 39(大事な仲間がいるから続けられる)	
カテゴリ16《職場だからこそ持つ不満》	
定義:大切にしたいと思うが故に起こる職場に対する組織体制や仲間、職員、立場に対する不満	
概念 40(立場と自分自身の間で起こる辛さ)	概念 41(職場内での人間関係の悪さ)
概念 42(職場体制への不満)	
カテゴリ17《対価があるから働ける》	
定義:収入を使う、休日を楽しむ等対価があるからこそ日常生活にメリハリができてバランス良く働くことができる	
概念 43(収入を得る・使うことの喜び)	概念 44(休日を楽しむからこそ就労・生活のバランスが整う)
カテゴリ18《意識し続ける一般企業での就職》	
定義:常に一般企業への就職を意識し続けており、可能であれば一般企業で働きたい思いがある	
概念 45(一般企業で働く希望を持ち続ける)	概念 46(一般企業での就職を目指し想定以上の体調悪化の表れ)
概念 47(一般企業で働きたい気持ちが薄れる)	
カテゴリ19《家族が与える所属感と孤立感》	
定義:家族との関わりによって生じる所属感や孤立感	
概念 48(家族は一員として戻れる存在)	概念 49(家族からの孤立)
カテゴリ20《新たな視点を取り入れる》	
定義:新しい視点を取り入れ、物事の捉え方が豊かになる	
概念 50(他者の視点に立てるようになる)	概念 51(教訓や学びからの新たな視点の芽生え)
カテゴリ21《過去と現在を比較する視点》	
定義:過去と比較する視点によって現在の自分自身や生活状況を捉える	
概念 52(障害を持つ以前の自分との比較)	概念 53(過去との比較から感じる現在の生活のありがたみ)
カテゴリ22《自分の身の丈で将来を考える》	
定義:仲間や職員等他者との関わりを通して自分の身の丈を自覚し、将来の自分を考える	
概念 54(仲間から知る自分の身の丈)	概念 55(今の安定感によって自分の将来を考えられる)

による自分の開放》が能動的に行われ、《新たな視点を取り入れる》ことで自分の成長の糧としている。

さらに、作業所以外での顔があり《家族が与える所属感と孤立感》を受け、収入や休日等の《対価があるから働ける》ことでモチベーションを維持している。また《過去と現在を比較する視点》から自分の現状を意味づけし《自分の身の丈で将来を考える》ことで、次への視点が生み出される。一方で、大切な《職場だからこそ持つ不満》があり、《意識し続ける一般企業での就職》が今の状況にブレを生じさせている。以上の要素が相互に関連し、継続的な就労の原動力となっていると考えられる。

②当事者の主体性獲得に必須な「頼られ」体験

研究結果で示されたように、福祉的就労における精神障害者の主体性獲得過程におい

て職員からの【「頼られ」体験】がプロセスを展開する大きな転機となり、主体性の獲得に不可欠な要素であることが明らかとなった。

援助者からの「頼る」という働きかけは、援助関係における援助する者—援助される者という立場ではなく、ある業務に対して働く一人一人という同じ立場、同僚やパートナーとしての関係性を構築している。「頼られ」た当事者は「自分が必要」と述べており、今、ここにいる自分と過去の体験を内包し、存在が認められ、信頼され、任される自分の実感が示されている。つまり、このアプローチを通じて当事者には自分と他者とが「同じ人間だと実感できる現実感」(向谷地 2009:5)が成立していると言える。

また、当事者は「頼られ」ることに対して負担感はなく迷いはあっても「チャンス」と捉えている。これは、次のような要件のもとで働きかけが行われていたと考えることができる。a 就労・生活リズムの定着。高い疲労感や体調の波、入院等不安定な状況に対処しながら1時間・1日・1週間・1年と一定の周期を重ね、就労と生活のリズムが整い、体得した「生活リズムのよさ」を維持し、習慣化させ継続できている。b 他者との関係性をわきまえる。職員を含め他者との関係性が「閉じられている」状態から周囲への関心を持ち、自然に関われるようになり、職員との関係性においては立場性の違いを認識し、感情的に「ぶつかる」ではなく適度な距離感を身につけている。c 素直さの出現。拒否的で他者の意見を受け入れず、物事へのこだわりが強く「盲目的」な面が薄れ、自分とは異なる考えを受容でき、素直さが見られ、実際に他者や物事への柔軟な行動ができている。d 信頼できる・理解者がいる。自分を否定せず受容し、理解してくれる存在があり、「信用できるんだ」と強く信じていることができる対象者がいる。以上の4項目を総合的に勘案し、要件が揃ったと見計らう力やタイミングの良さが、アプローチを効果的にするものと考えられる。

近年、対人援助職の専門性は社会福祉や精神保健福祉の領域に関する知識があり、援助技術を駆使し、就労支援を行うことが求められてきている。しかし、本研究の結果からは、職員が援助を行うことだけではなく、当事者に対し、業務の困難さやできなさを表出し、「頼る」という働きかけが大きな影響を及ぼしていることと、その必要性が明確化された。援助者が「頼る」ことによって一方的に援助しつ放しの状態だけでなく、当事者も援助する者になることを可能にし、双方向に支え合う関係性を成立させ、さらに、当事者の主体性を獲得する過程における動機付けと促進力になっていると考えられる。以上から、就

労支援における援助者が意図的に困難さやできなさを表出し、当事者を信頼し「頼る」という「技法としての『頼り』」の可能性が示唆された。

③働く上で重要な基盤としての「等身大の自分」の確立

発病し、孤独で失敗を繰り返す中で存在価値を実感できずにいた当事者が福祉的就労を通じて職場になじみ、素直でありのままの自分へ変化し、自信や可能性を見出している。また、主として精神疾患や障害と向き合い自己管理能力を身につけ、「病気になって幸せ」という肯定的な捉え直しをしている。過去の自分と対比させ、今のほうが「得たものが大きい」という感覚は、一人の人間が精神疾患や障害がある「にもかかわらず」生きる存在として「尊厳の回復」(谷中 1996:125)がなされ、自分の存在価値を再認識し【「等身大の自分」の確立】がなされている。図1からもわかるように、これが基盤として確立されていなければ、働く自分のスタイルや仲間の力によるオープンや吸収、就労を継続する原動力といった次の段階、さらにはその動因も生まれてこない。つまり、「等身大の自分」は「働く主体としての自分」を見出すことにつながり、その確立は当事者が働く上で重要な基盤となることが考えられる。

働く一人の人間に立ちかえった時、自分の存在価値の実感なしに日常生活を営むことはできるだろうか。当事者の「プライド」や「ここにいるぞ」という言葉からも、尊厳を持った「等身大の自分」が個として存在し、それを実感できるのは、他者との間においてでしかできないことであり、他者から認められ、それを実感できることは障害の有無に関わらず、働く主体として不可欠な要素と言えよう。

(3) おわりに

本研究の成果として、障害当事者の言葉を用いて、精神障害者の主体性獲得過程において、外的要因として援助者からの【「頼られ」体験】とこれが契機となり、働く上で基盤となる【「等身大の自分」の確立】の2つが必要不可欠であることを明確化した。これにより今後の就労支援における援助関係のあり方や援助の方法等に具体的な示唆を与えることができるだろう。

今後の課題として、精神障害者以外の身体障害・知的障害者を対象にした主体性獲得過程についての比較検討や各障害の特徴に応じた就労支援モデルの構築を目指して研究を継続していきたい。

(4) 文献

阿部好恵 (2008) : 「自分らしさ」を取り戻して—精神障害者が語る地域生活で手に入れたもの—、響き合う街で、46、32-48
向谷地生良 (2009) : 技法以前—べてるの家

のつくりかた—、医学書院
谷中輝雄 (1996) : 生活支援—精神障害者生活支援の理念と方法—、やどかり出版

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①阿部好恵、精神障害者の福祉的就労における主体性獲得過程に関する研究、帯広大谷短期大学紀要、査読有、第50号、2013、99-116

http://ci.nii.ac.jp/els/110009557317.pdf?id=ART0010003478&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1371644025&cp=

②阿部好恵、精神障害者の「語り」を対象とした質的研究の意義—やどかり研究所報告・交流集会における研究報告から—、帯広大谷短期大学紀要、査読有、第48号、2011、87-98

http://ci.nii.ac.jp/els/110008712518.pdf?id=ART0009790141&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1371285254&cp=

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 好恵 (ABE YOSHIE)
帯広大谷短期大学・社会福祉科・講師
研究者番号：90406009

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：